

# ◆連載

# いま留萌をかし

## ●留萌医療事始

留萌の医療の始まりははっきりとはしていない。ただ、留萌がまだルルモツベと呼ばれていた時代につきのような記録が残っている。

江戸時代今から二百年ほど前、蝦夷地でホウソウ(天然痘)が流行した。その流行がマシケまでひろがり、多くのアイヌの人たちがなくなつたという。そのころ、隣村のルルモツベにコタンピルという村長がいた。彼はルルモツベにもホウソウが流行するに違いない。そのときには、我々アイヌは男女残らず山奥へ逃げるべきだろうか、と当時ルルモツベを治めていた支配人の村山長三郎に相談した。長三郎は山奥にひきこもると食糧などの差し入れも面倒なのでやめたほうが良いと答えた。そして、マシケとルルモツベの境界に網をはってホウソウが入らぬようにした。すると、不思議なことにこのホウソウ

の流行は隣のトママエには入ったがルルモツベには一人の患者もでなかつたという。

この当時の医療体制がどんなものであつたかははっきりしない。その後、幕末に庄内藩がルルモツベを支配した時に庄内藩の蝦夷地詰めのなかに医師が加えられていた。しかし、ルルモツベの常駐ではなかつたらしい。この医師は庄内藩の支配地を巡回して医療を施していたらしい。ただ、これが留萌の医療の事始といえるのではないだろうか。

その後、明治五年四月、官立の札幌病院留萌出張所が開設された。明治八年四月には札幌病院所轄の留萌出張病院となり、同年六月留萌支庁が札幌本庁に統合され同病院も本庁に統合された。翌九年四月には留萌病院出張所と改称され、九月には再度、札幌病院留萌出張所となつた。このころは、まだ、北海道の行政

もよちよち歩き始めたばかりで、医療体制もまだ確立していなかつたといえよう。このころの留萌在住の医師の名前は判然としない。

明治十四年に留萌の医療界の草分け的な人物である長尾甲吾が札幌病院留萌出張所勤務を命ぜられて留萌に赴任した。その後、開拓使が廃止になると私立長尾病院として、約二十年にわたつて留萌の医療をリードするのである。明治二十年代から三十年代にかけて留萌で活躍した医師は長尾の他、明石雪城、浦上芳達、上石玄偉、王子一貫、千種佐太郎、村田政三、最上将成、竹前貞斉、三上繁八などである。当時は医者との茶の間にベツトドが一つおいてあるだけだつたという。長尾医師にいたつては往診には「駕籠」にのつていったという。

留萌にも一応医療体制が整つてきたのであるが、公立病院設置の要望が強くなつてきた。隣の増毛には既に明治十年に公立の増毛病院を設置しており、それにも刺激されたらしい。明治四十年に村の有志の尽力で増毛病院長の榎本芳二を病院長に迎え、村立病院を設立した。その後、病院新築の計画がだされたが、村民有志の反対に合い、一時頓挫するが、五十嵐億太郎などの仲介で現在の市立病院の場所へ私立留萌病院として開業した。榎本芳二は昭和九年に町立留萌病院が開院されるまで、二十七年間にわたり、留萌の人々の健康をまもりつづけたことは長尾甲吾につづいて留萌医療界の功績者といえるのではなからうか。この榎本の留萌病院の地は現在も留萌の医療の中心となつている。

その後、明治五年四月、官立の札幌病院留萌出張所が開設された。明治八年四月には札幌病院所轄の留萌出張病院となり、同年六月留萌支庁が札幌本庁に統合され同病院も本庁に統合された。翌九年四月には留萌病院出張所と改称され、九月には再度、札幌病院留萌出張所となつた。このころは、まだ、北海道の行政



私立留萌病院

特集 わが町の昭和62年……

昭和62年12月／発行・留萌市編集・総務部秘書企画課印刷・株式会社留萌新聞社

1987